

## KANDA × TUFS 英語モジュールにみる インド英語の 発音の特徴

著者	関屋 康, 矢頭 典枝
雑誌名	言語教育研究
号	30
ページ	99-133
発行年	2019-11
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001653/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001653/</a>

# KANDA×TUFS 英語モジュールにみる インド英語の発音の特徴

## Pronunciation Features of Indian English as Described in the KANDA×TUFS English Modules

関屋 康  
矢頭 典枝

### はじめに

近年、日本人は多様な英語に接する機会が増えてきた。世界各国から日本を訪れる外国人の数も年々増加し、国際共通語としての英語の役割がますます重要になってきている。ビジネスの世界に目を向けると、日本の企業人はアジアをはじめ全世界に進出し、現地の多様な英語に接している。

日本の英語教育の現場でも、世界の様々な地域から英語母語話者と非母語話者が教壇に立つようになってきた。アメリカ英語を規範とすることが多い日本の教育機関では学習者たちだけでなく教える側の教員たちにも混乱が生じている状況が報告されている（関屋、矢頭、マーフィー、2015；新城、矢頭、2014）。

本稿では近年目覚ましい経済発展を遂げているインドの英語に焦点を当て、その発音の特徴を解説する。インド英語の理解を妨げる要因として、インド英語特有の発音がしばしば取りあげられてきた(Bansal, 1976; Nihalani, Tongue, Hosali and Crowther 2004; Pandey, 2015)。本モジュールを通してインド英語の音声的特徴を理解することより、インド英語がより理解しやすくなるものと期待できる。以下、インド英語を理解する上で重要なインドの民族的・言語的背景を概説した上で、「KANDA×TUFS 英語モジュール・インド英語版」に言及しながら、インド英語の発音の特徴を解説

する。

## 1. インドの民族的・言語的背景

2019年現在、インド共和国（以下、インド）は、人口が13億人を超え、近い将来、中国を抜いて世界最大の人口保有国になるといわれている。広大な国土を有するインドは民族的・言語的多様性がきわめて顕著であり、数多くの言語が話されている。

最も多くのインド人に話されているのは、首都のデリーを含むインド北部と中部で広く用いられているヒンディー語（インド・アリア語系）で、インド人の過半数（57.1%）がこの言語を話すことができる。2番目に多いのは東部で話されているベンガル語（同語系）で、インド人の8.9%がこれを話す。3番目に多いのは、ムンバイを含む西部で話されているマラティー語（同語系）で、インド人の8.2%がこの言語を話す。また、インド中南部と南部ではドラヴィダ語系のテレグ語（7.8%）、タミル語（6.3%）、カンナダ語（4.94%）などが話されている（Government of India, 2011）。

インドにおける英語話者は、2011年インド国勢調査によれば人口の10.6%、数でいえば1億3千万人に上る（Ibid.）。英語圏の国の中で最も人口が多いアメリカの人口が約3億2千万人、二番目に人口が多いイギリスの人口が約6,600万人であることに鑑みると、インドはアメリカ合衆国に次いで、英語話者の数が世界で二番目に多い国だといえる。

インド共和国憲法第343条1項により、インドの連邦（国家）レベルの公用語は「デーヴァナーガリー文字で記述されたヒンディー語」と定められている。英語は公用語に指定されていないが、同条2項により、連邦政府のすべての業務遂行のために使用される準公用語的な扱いを受け、公的部門だけでなく、教育、商取引、メディアなど社会で広く使用されている（Government of India, Ministry of Law and Justice, Legislative Department, 2018）。また、英語は、母語話者がほとんどいないので

民族的・地域的に中立的な言語であり、そのためエリート層の共通語として用いられている。

他方で、インドの複雑な多言語状況を踏まえ、国家の一体性を担保するために、インド連邦政府は、各州が州内で話されている「地域語」を州レベルの公用語に定める権利を保障している。各州は、インド共和国憲法第 8 附則によって指定されている 22 の言語 (Scheduled languages) と英語から 1 つ以上の州レベルの公用語を定めることができる。この 22 の言語を「語族別」に整理すると次のようになる (Ibid.)。

・ **インド・アーリア系言語 (Indo-Aryan languages) :**

15 言語、インド中央部より北、西、東に広く分布

アッサム語 (Assamese)、ベンガル語 (Bengali)、ドゥグリー語 (Dogri)、グジャラート語 (Gujarati)、ヒンディー語 (Hindi)、カシミール語 (Kashimiri)、コンカーニー語 (Konkani)、マイティリ語 (Maithili)、マラティー語 (Marathi)、ネパール語 (Nepali)、オリヤー語 (Odia)、パンジャーブ語 (Punjabi)、サンスクリット語 (Sanskrit)、シンディー語 (Sindhi)、ウルドゥー語 (Urdu)

・ **ドラヴィダ系言語 (Dravidian languages) :** 4 言語、南部に広く分布

カンナダ語 (Kannada)、マラヤラム語 (Malayalam)、タミル語 (Tamil)、テレグ語 (Telegu)

・ **シナ・チベット系言語 (Sino-Tibetan languages) :** 2 言語、北東の国境線に沿って分布

ボド語 (Bodo)、マニプリ語 (Manipuri)

・ **オーストロ・アジア系言語 (Austro-Asiatic languages) :**

1 言語、主に西部に点在

サンターリ語 (Santhali)

このように、インドは一国を成すとはいえ、民族的・言語的多様性が極めて顕著であるため、言語政策も一筋縄ではいかないのである<sup>1</sup>。従って、この国で話される「インド英語」がこうした民族的・言語的多様性を多分に反映したものであることは想像に難くない。

## 2. KANDA×TUFUS 英語モジュールのインド英語版

日本人が世界の多様な英語に接するようになった状況のなかで、世界の英語の言語学的特徴の学習を可能にするウェブ教材「KANDA×TUFUS 英語モジュール」（通称「英語モジュール」）<sup>2</sup>が誕生した。本ウェブ教材は、社会言語学、英語音声学、方言学、第二言語習得の分野における研究の蓄積に基づいて開発され、World Englishes の研究分野で Kachru が提唱した「三つの円」の概念（Kachru, 1985）を念頭においてモジュール開発する英語変種を選定した。この概念では、英語を国民の大半が母語あるいは第1言語として使う国々を「内部圏 (Inner Circle)」、公用語としてあるいは第2言語として使う国々や地域を「外部圏 (Outer Circle)」、外国語として学校教育のなかで教えている国々や地域を「拡張圏 (Expanding Circle)」と称している。

本ウェブ教材では、内部圏からアメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、アイルランドの英語、外部圏からシンガポールとインドの英語を取り上げ、2019年現在、これらの8つの英語会話モジュールを公開している。そして、現在、フィリピン英語とマレーシア英語のモジュールも開発中である。

日本の英語教育の規範となっているのはアメリカ英語である。本ウェブ教材の開発者たちは、日本の英語学習者たちが、アメリカ英語のみが正しく優れた英語だと

---

<sup>1</sup> インドが初めて言語政策を導入した際、ヒンディー語のみを国家の公用語に指定したが、ヒンディー語を話さない南部を中心とする広範囲の地域からの反発を受けたため、打開策として州公用語の制定に踏み切った (Holmes, 2013)。

<sup>2</sup> 「英語モジュール」は神田外語大学と東京外国語大学の専用サイトで公開されている。その開発の意義と特徴および開発方法などについては関屋、矢頭、マーフィー (2015) を参照されたい。

いう認識を持たず、英語の多様性を理解し、尊重する姿勢を身につけることを目指している。世界の英語変種に触れることで、規範は一つではないこと、世界の英語変種は等価であり、一つの英語変種が他より優れているわけではない、という意識が高められる（吉富、2015）と我々は信じて本ウェブ教材を開発している。英語モジュールは本来、神田外語大学と東京外国語大学の社会言語学、英語学、英語音声学、第二言語習得などの授業で使うことを第一の目的として開発されているが、大学生だけではなく高校生や社会人も多様な英語を理解できるように工夫されている。しかも、本ウェブ教材の開発では公費助成を受けている<sup>3</sup>ため、無料でインターネット配信しており、誰でも費用の負担なく気軽に活用できるという利点をもつ。さらにモバイル版もあり、利用者はいつでもどこでもそれを視聴することができる。最近では、通訳の授業や他大学の英語の授業、言語学やコミュニケーション関係の授業でも使われることがあるとの報告があり、徐々に日本全国での活用が広まっている。また、英語モジュールで扱った英語圏の国々に、修学旅行で行く中学生や高校生、さらに赴任する前あるいは赴任中の日本人海外駐在員やその家族によっても利用されるなど、大学生以外の利用者が次第に増えてきている。

各英語会話モジュールには40の動画があり、前半の20会話（1. 挨拶する～20. 人を紹介する）では、各国の文化や状況を反映させ、その英語固有の語彙や語法を多く含む会話を集めたスクリプトで構成されている。他方、後半の20会話（21. 感謝する～40. 助言する）では、部分的に語彙や表現をその国のものに変え、その国固有の発音で会話がなされるが、基本的には同じスクリプト構成に依っている。つまり、後者の20会話では、基本的には同じセリフをアメリカ人、イギリス人、シンガポール人などの8つの国の出演者達が発音するため、それぞれの英語の特徴が浮き

---

<sup>3</sup> アメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、アイルランド、シンガポールの英語モジュール開発にあたっては、日本学術振興会の科学研究費（基盤研究(B)、課題名：『社会言語学的変異研究に基づいた英語会話モジュール開発』、課題番号：24320106、研究期間：2012年4月～2016年3月、研究代表者：関屋康（神田外語大学））を受領した。インド、フィリピン、マレーシアの英語モジュール開発では、本稿の文末の謝辞で示す科学研究費を受領した。

彫りとなる。これがこの英語モジュールの最大の特色であると言える。

また、字幕と日本語訳に加え、各英語に特徴的な単語・表現・発音・語法・社会的背景に関する説明を見ることが出来る点も大きな特色である。発音については、各英語の特徴的発音が高校生や一般の利用者にもわかりやすいように、一部カタカナ表記を用いる一方、大学での授業においても使えるように国際音声記号や専門用語（「有声」、「長母音」、「声門閉鎖音」など）も併記されている。

英語モジュールの発音解説には、大きく分けて次の3種類の説明を付している（新城、2015:61）。

- (1) 各英語変種の音声の特徴を学ぶための分節音の特徴に関する説明
- (2) 英語母語話者の発話の聞き取りや含意の理解につながるよう、自然発話で頻繁に起こる音の連続や脱落・変化に関する説明
- (3) 強調や対比のイントネーションが使用されている箇所に関する説明

インド英語モジュールでは、上記の3つの種類の説明は、他の英語変種とは異なる顕著な特徴、利用者の聞き取りに大きく影響してくると思われる発音に対して、優先的に付されている。

図1. 神田外語大学のインド英語モジュールのウェブページ  
「会話1. 挨拶する」

The screenshot displays the website interface for the 'English Modules Dialog' project. At the top, there are logos for KANDA TUFS and English Modules Dialog. A navigation bar shows '神田外語大学 > 東京外国語大学 英語モジュール > インド英語'. Below this, there are controls for '挨拶する' (Greeting), including '状況表示' (Status Display), 'テキスト表示 ON' (Text Display ON), 'ムービー表示 ON' (Movie Display ON), and language selection options for '英語' (English) and '日本語' (Japanese). The main content area is split into two columns: 'TEXT' and 'MOVIE'. The 'TEXT' column contains a dialogue between two characters (A and B) with English and Japanese text. The 'MOVIE' column shows a video player with a scene of a woman and a man talking in front of a building. A note at the bottom of the movie player states: '会話文の右にページアイコンがある場合、マウスオーバーすると『発音と語彙』の説明をご覧頂けます。' (If there is a page icon on the right of the dialogue text, hovering the mouse over it will allow you to view the explanation of pronunciation and vocabulary.)

英語モジュールの撮影では、出演者たちは事前に渡されたスクリプトをある程度練習し、撮影現場では同郷の者同士で話すときの自然な話し方をするようにと指示される。母語話者同士の自然会話という場面設定のため、発話速度が英語学習教材としてはかなり速いのも英語モジュールの特色の一つである。

インド人の英語の話し方は、学歴差、母語、欧米の英語との接触の度合いといった要因によって左右され、個人差が大きい。インド英語モジュールの8名のインド人出演者たちの内7名が英語による高等教育を受けた高学歴のエリート層である。



出身地は、北部が 6 名（デリー 4 名、パンジャープ 2 名）、中西部が 2 名（ムンバイ 1 名、プネ 1 名）であり、母語はヒンディー語、パンジャープ語、マラティー語、ウルドゥー語などである。

会話 1 に登場する男女はともに高学歴であり、欧米の英語との接触が中程度にある。女性はデリー出身の大学院生で母語がヒンディー語、男性はムンバイ出身の大学生で母語がマラティー語である。女性の方は上昇調のイントネーションで話す個人的な癖があるとはいえ、この二人の話し方は高学歴インド人の英語の話し方の典型的な好例である。

会話 3 に登場する女性たちは二人とも厳格な英語による高等教育を受けた大学院生である。A はインド中西部のプネ出身で母語がヒンディー語とウルドゥー語、B はパンジャープ出身で母語がパンジャープ語である。二人とも英語が流暢かつ早口で、英語が堪能なインド人とは英語で話す。

会話 40 に登場する女性 A は、デリー出身でヒンディー語が母語であり、アメリカ合衆国に留学していたため流暢に英語を話す。この会話のなかの役柄のように実際に大学の教員である。会話 21 の女性 A（社会人）と会話 8 の男性（大学生）もデリー出身でヒンディー語が母語であり、高学歴である。

会話 2 や 4 に出てくる男性はパンジャープ出身でパンジャープ語が母語である。英語の読み書きは中等教育で学んだが、高学歴ではなく英語を話すのが苦手である。インドの非熟練労働者の英語の話し方の一例である。

Gargesh (2004:993) は、英語を話すインド人を 3 つのカテゴリーに分類している。

- (1) 英語の運用能力が英語母語話者に近い (near-native) ごく少数の人々
- (2) 英語の運用能力が中上級で教育レベルが高く、その英語変種が英語教育の基準とされる人々であり、職種は国家公務員、学校教員、科学者、ジャーナリスト、ビジネスマンなど

(3) 英語の運用能力が低く、自分に関わる領域においてのみ英語を使える人々であり、職種は店員、飲食店の給仕係など

インド英語モジュールの出演者たちは、会話 2 や 4 に出てくる男性以外は、(1)あるいは(2)に属すると考えられる。

### 3. 英語モジュールで学べるインド英語の発音の特徴

「インド英語」とは、インド人が第二言語として話している多様な英語変種の総称 (cover term) である (Gargesh, 2004:992)。インド人の英語の話し方は、前述のインドの民族的・言語的多様性を反映し、母語が何語であるか (地域差) という要因に加え、学歴差、欧米の英語との接触の度合いといった要因によっても左右されるため、発音については、個人差がかなりある。例を挙げれば、会話 4 に出てくる“nervous”という語の発音が、出演者の女性と男性では随分異なる。しかし、教育レベルが高いインド人が話すときされる「標準インド英語」にはある程度一般化できる以下のような特徴がある。

なお、本稿ではインド英語の発音の特徴を記述するために、イギリス容認発音 (Received Pronunciation) と北米の一般米語 (General American) 発音とを比較することが多い。以下、それぞれ RP、GA と記す。

#### 3. 1. 規範とされる RP

教育レベルが高いインド人は、学校教育において RP を規範とするよう教育されてきた (Sailaja, 2009:27)。RP は「BBC 英語 (BBC English)」とも呼ばれ、イギリスの国営放送 BBC のアナウンサーたちの多くが話すとき認識されている発音である<sup>4</sup>。

---

<sup>4</sup> RP は上流階級の子弟が全寮制のパブリックスクールで身に付けた発音が元となっているとされる社会階層的方言で、話者の数はイギリスの人口の数パーセントもない。そこで近年では、RP とロンドンの労働者階級の社会方言とされるコクニー (Cockney) との中間的なタイプの英語が支配的に

その特徴は、car や cart といった語で、母音のあとの/r/を発音しない非 R 音性的な (non-rhotic あるいは r-less) な英語<sup>5</sup>だということである。例えば、会話 1 の“are”、会話 31 の“starving”、会話 9 の“nervous”の/r/などは発音されていないことがインド英語モジュールで観察される。

また、“can't”や“class”の母音は RP では長母音の/a:/、GA では/æ/となるが、インド英語では前者で発音されることが多く、インド英語モジュールでもこれが観察される。“worries”、“vase”、“herbal”、“frustrated”、“schedule”等の語も RP で発音されている。例えば、“schedule”は GA の/'skedʒu:l/ではなく、RP の/'ʃedʒu:l/で発音されている。インド英語モジュールに出てくるこれらの語に関する発音説明では表 1 のように記述されている。

表 1. RP に関する発音説明の例

How <u>are</u> you, Priya?	"are"の"r"は発音されていない（英英語・印英共通）。 "How are you"で「ハウワーユー」のように聞こえる。[会話 1. 挨拶する]
I'm <u>starving</u> . Let's eat.	"stARving"は長母音/a:/で、"r"は発音されない（英英語・豪英語と共通）。[会話 31. 好きなものについて述べる]
I need to finish this book report <u>first</u> .	"fɪRst"の"r"は発音されておらず（英英語・印英共通）、 「ファーストゥ」のように聞こえる。[会話 6. 人にものをあげる]

なってきた。これは、ロンドン以東のテムズ河の河口域から広まったことから「エスチュアリー英語 (Estuary English)」と呼ばれ、RP に近い発音の話者からコクニーに近い話者まで含まれる。イギリス英語モジュールでは、出演者たちの話す英語を「エスチュアリー英語」と位置付け、それがイギリス英語の標準的な発音だとしている。

<sup>5</sup> Kachru が提唱する「三つの円」の内部圏と外部圏に属する英語は、car や cart といった語で、母音のあとの/r/を発音するかしないか、という基準に沿って二つのカテゴリーに大抵分類される。それを発音するのはアメリカ英語に代表される R 音性的 (rhotic あるいは r-ful) な英語であり、カナダ英語、アイルランド英語、スコットランド英語、フィリピン英語がこれに分類される。他方で、それを発音しないのはイギリス英語に代表される非 R 音性的 (non-rhotic あるいは r-less) な英語で、オーストラリア英語、ニュージーランド英語、シンガポール英語、インド英語、マレーシア英語がこれに分類される。

I was a bit <u>nervous</u> initially, but I got over it quickly.	"nERvous"の/rは発音されていない（英英語と同じ）。[会話 9. 経験について述べる]
I <u>can't</u> draw their faces properly. "	"can't"の母音は長く「アー」のような音になっている（印英・英英語共通）。[会話15. 能力についてたずねる]
I had two <u>classes</u> .	"clAsses"は長母音で「アー」のように発音されている（英英語・印英共通）。[会話 4. 経験について述べる]
No <u>worries</u> .	"wOrry"は日本語の「ア」と同じ発音で、「ワリー」のように聞こえる（英英語・印英共通。米英語では r の音色を伴う長母音。）[会話 23. 謝る]
I accidentally knocked down your <u>vase</u> and it broke.	"vAse"の/vは[v]で発音されており（印英の特徴）、母音は長母音（英英語・印英共通）。[会話 23. 謝る]
<u>Herbal</u> tea?	"herbal"の/hは発音されている。（英英語・豪英語と共通）。米英語とカナダ英語では発音しないことが多い。 "hERbal"の"r"は発音されていない（英英語・豪英語と共通）。米英語とカナダ英語では発音する。[会話 31. 好きなものについて述べる]
You look so <u>frustrated</u> .	"frustrated"は英英語と同様、"-trate"にアクセントがある。[会話 37. 指示する]
This is my <u>schedule</u> .	"schedule"の発音はイギリス式で「シェデュール」になっている。このとき、/d/はそり舌音[d]で発音されている（印英の特徴）。[会話 40. 助言する]

### 3. 2. /r/のたたき音化

日本人英語学習者にとって、インド英語の最も気になる発音は、語頭、語中の/r/がたたき音 (tap) の[r], 或いは「震え音」(trill) の[r]<sup>6</sup>で発音されることだと思われる。インド英語モジュールでは、語頭、語中の/r/のほとんどが前者のたたき音で発

<sup>6</sup> 一般の人々はよくこれを「巻き舌」と表現しているが、これは音声学的な用語ではないので、本稿ではこの語の使用を避ける。

音されるのが観察された。例えば、会話 21 に出てくる“return”と“recipe”の/r/はともにたたき音で発音され、「リターン」、「レシピ」のように日本語のラ行音と同じに聞こえる。表 2 はその一部を説明している。

語末の/r/の後に母音が続く場合もたたき音が観察される。表 2 に示される会話 24 の“for a”や会話 25 の“your advice”の連続でこれが観察される。

なお、すでにみた 3.1. では“nervous”の/r/は表 1 で示されるように「r/は発音されていない」と説明している。これを発したのは教育レベルの高い女性であるが、この動画のもう一人の出演者である高学歴ではない男性は、表 2 に示すように/r/をたたき音で発音している。同じインド人であっても学歴によって発音が異なることがこの動画で鮮明となっている。

表 2. /r/のたたき音化に関する発音説明の例

Hi, <u>Richa</u> .	"Richa"の/r/はたたき音で発音されている。日本語のラ行と同じ。[会話 21. 感謝する]
Hi, <u>Priyanka</u> .	"Priyanka"の/r/もたたき音で、日本語のラ行と同じ。[会話 21. 感謝する]
I just wanted to <u>return</u> your <u>recipe</u> book.	"return"の最初の/r/と"recipe"の/r/はともにたたき音で発音されている。日本語のラ行と同じ。[会話 21. 感謝する]
We had an <u>orientation program</u> in the morning.	"orientation program"の/r/は三つともたたき音で発音され、日本語のラ行と同じ。[会話 9. 経験についてたずねる]
You would need two cups of basmati <u>rice</u> .	"rice"の/r/はたたき音で、日本語のラ行と同じ。[会話 14. 手段についてたずねる]
I'm looking <u>for a</u> face cream.	"for"の/r/はたたき音で、日本語の「ラ行」のような発音になっている（印英の特徴）。それが後ろの"a"とつながって、「フォラ」のように発音されている。[会話 24. 比べる]
Richa, I need <u>your advice</u> .	"Richa"と"your"の/r/はたたき音で発音されている（印英の特徴）。[会話 25. 提案する]

You were not <u>nervous</u> , were you?	"nERvous"の/r/はたたき音で「ネルヴス」のように聞こえる。[会話9. 経験について述べる]
---	--

### 3. 3. 歯茎閉鎖音/t/と/d/の反り舌閉鎖音化

歯茎閉鎖音（破裂音）の/t/と/d/で発音される“too”や“do”の子音をインド人が発音すると、多くの日本人英語学習者は違和感をもつ。それは、これらの音が、反り舌閉鎖音[t]と[d]で発音されるからである（Sailaja, 2009:21）。会話1に出てくる“top”や会話14に出てくる“two”の/t/が反り舌閉鎖音[t]、会話24に出てくる“do”の/d/などが反り舌閉鎖音[d]で発音されている点がインド英語モジュールのなかで表3のように説明されている。また、/t/と/d/が語頭に来る場合だけでなく、“product”や“good”など語中あるいは語末に来る場合も、反り舌閉鎖音が観察されることも説明されている。

表3. 歯茎閉鎖音/t/と/d/の反り舌閉鎖音化に関する発音説明の例

That's one of the <u>top</u> business schools!	"top"の/t/は舌先を後方に反らせ、そり舌音[t]で発音されている（印英の特徴）。無気音なので、「ト」と「ド」の中間のように聞こえる。[会話1. 挨拶する]
about <u>two</u> cups of cut vegetables	"two"の/t/の発音はそり舌の[t]を使っている（印英の特徴）。[会話14. 経験についてたずねる]
We <u>do</u> have <u>Mexito</u> , but we also have a new <u>product</u> called Aloefresh.	"Mexito"や"product"の/t/、及び"do"の/d/は反り舌音で、それぞれ[t]、[d]で発音されている。（印英の特徴）。[会話24. 比べる]
He is <u>visiting</u> me tonight.	"visiting"の/t/の発音は反り舌の破裂音[t]を使っている（印英の特徴）。[会話14. 経験についてたずねる]
Oh yeah, it was <u>good</u> .	"good"の/d/は反り舌音[d]で、舌先を後方に反らせて、舌の裏面を歯茎につけて発音している（印英の特徴）。[会話9. 経験についてたずねる]

What is the <u>matter</u> ?	"What"、"matter"の/t/は反り舌の[t̪]を用いて発音している (印英の特徴)。[会話 25. 提案する]
-----------------------------	---

### 3. 4. インド英語の非 R 音性と R 音性

前節では標準インド英語は非 R 音性的だと述べたが、これはあくまでもインドの学校教育で伝統的に英語発音のモデルとされてきた RP の影響を受けた標準インド英語発音 (Standard Indian English Pronunciation) の特徴である (Sailaja, 2009)。実際は教育レベルが高いインド人でも R 音性的な英語を使うことがある (Nihalani, Tongue, Hosali, and Crowther, 2004)。この事実は本モジュールでも母音の後の/t/が発音されている場合があることにも反映されている。この場合、歯茎接近音の[t̪]が使われることもあれば、たたき音の[t], 反り舌接近音の [ɽ], 摩擦性を伴ったふるえ音[r]も使われている。表 4 は R 音性的な発音が観察される発音説明のいくつかの例を示す。

表 4. R 音性的な発音に関する発音説明の例

Add two cups of <u>water</u> . Close the <u>cooker</u> .	"water"と"cooker"の"r"はそり舌接近音 [ɽ] で発音されている。[会話 5. 手段についてたずねる]
Will it be safe to leave my things in the <u>locker</u> ?	"locker"は語末の/t/をそらせて終わっている。[会話 16. 禁止する]
But they understand if I choose to come <u>here</u> .	"here"の/r/はそり舌接近音 [ɽ] で発音されている。[会話 36. 理由を述べる]
It's my pleasure, <u>Sir</u> .	"Sir"の/r/はそり舌接近音 [ɽ] で発音されている。[会話 20. 人を紹介する]
Welcome to India, <u>Sir</u> .	"Sir"の/r/はそり舌接近音 [ɽ] で発音された後、そり舌摩擦音 [ʂ] に移行している。[会話 20. 人を紹介する]
It's just that you still haven't taken the <u>core course</u> for your <u>major</u> .	"core course"の/r/と"major"の語末の"-er"は、舌をそらせて弱く摩擦が起こっている。[会話 40. 助言する]

If you don't take it next <u>semester</u> , you might have difficulty completing your degree on time.	"semester"の語末の"-er"は、舌をそらせて終わっている。 [会話 40. 助言する]
Wow! These are really cool <u>pictures</u> !	"pictures"の語末の"-er"は、そり舌接近音の [ɹ] で発音されている。[会話 32. 好きな行動について述べる]
I'm not <u>sure</u> .	"sure"は歯茎接近音の [ɹ] で発音している。米英語と同じ。 [会話 35. 条件をつける]
But you shouldn't really let <u>her</u> get to you.	"her"は歯茎接近音の [ɹ] で発音している。米英語と同じ。 [会話 35. 条件をつける]
Alright. If I learn anything <u>more</u> , I'll let you know.	"more"は歯茎接近音の [ɹ] で発音している。米英語と同じ。 [会話 35. 条件をつける]
Are you <u>sure</u> ?	"sure"は歯茎接近音の [ɹ] で発音している。米英語と同じ。 [会話 3. 人にものをあげる]

インドでは非 R 音性的特徴の方が格式が高いという意識があり、非 R 音性的なインド英語を話す話者でもカジュアルな会話では母音の後の /r/ を発音することがよくある (Sailaja, 2009)。また、店で R 音性的なインド英語を話す店員に話しかける時は R 音声的な発音をすることが報告されている (Sailaja, 2009)。同一話者の発音上の変異はスピーチスタイルの調整モデルであるスピーチ・アコモデーション理論 (Speech Accommodation Theory: Giles, Mulac, Bradac, and Johnson, 1987) の収斂 (convergence) の好例である。この場合、非 R 音性的なインド英語話者が店員の R 音性的特徴に合わせるという点で「下向き収斂」(downward convergence) であると言える。

### 3. 5. /w/と/v/の無区別、唇歯接近音化

インド英語では、/w/と/v/を区別せず、両方とも唇歯接近音の [v] で発音される傾向



がある (Sailaja, 2009:20)。日本人英語学習者の耳には、/w/が[v]、/v/が[w]で発音されるように聞こえる。たとえば、会話 1 の“work”や会話 22 の“welcome”がそれぞれ「ヴァーク」、「ヴェルカム」のように聞こえる。また会話 23 のなかの“vase”が「ワーズ」のように聞こえる。表 5 にこの点についての説明例を挙げる。

表 5. /w/と/v/の無区別、唇歯接近音化に関する発音説明の例

I <u>work</u> for an MNC.	"work"の/w/は[v]で発音され、「ヴァーク」のように聞こえる (印英の特徴)。[会話 1. 挨拶する]
Oh, <u>we</u> are looking for Kancivaram in shades of pink.	"we"の/w/は[v]で発音され、「ヴィー」のように聞こえる。[会話 2. 注意をひく]
<u>Which</u> one do you think I should buy?	"which"の/w/は[v]で発音されている。[会話 18. 意見を述べる]
And after <u>Vice</u> Regal Lodge, turn right.	"Vice"の/v/は[v]で発音され、「ワイス」のように聞こえる (印英の特徴)。[会話 17. 場所についてたずねる]
I accidentally knocked down your <u>vase</u> and it broke.	"vase"の/v/は[v]で発音されており (印英の特徴)、母音は長母音 (英英語・印英共通)。[会話 23. 謝まる]

但し、モジュールの会話の中では/w/を/v/と区別して発音している場合も多くある。

会話 2: We'll have to wait patiently.

(“We”も“wait”も両唇接近音の/w/として発音されている。)

会話 3: We can wait for you.

Don't worry.

会話 5: First, soak rice in water for 30 minutes.

会話 7: Where exactly do you want to go?

会話 8: What is the matter?

会話 13: Which movies do you want to watch?

このヴァリエーションが単語や音声環境によるものなのか、或いは話者の母語、教育レベル、英語運用能力、母語の影響なのかという点に関する先行研究はなく、明らかでない。ここではあくまでもインド英語の 1 つの傾向的特徴と捉える方が無難であろう。

3. 6. /ei/と/ou/の単母音・長母音化

1. 容認発音 (RP) では長母音が /i:/, /u:/, /ɔ:/, /ɑ:/, /ə:/ (/ɜ:/) の五つであるが、インド英語では、これに /e:/ と /o:/ が加わり、次の七つとなる: /i:/, /e:/, /u:/, /o:/, /ɒ:/ (RP の /ɔ:/ に相当), /ɑ:/, (RP の /ɑ:/ に相当), /ə:/。これは、インド英語では、二重母音 /ei/ と /ou/ が単母音・長母音化する傾向があり、それぞれ /e:/ と /o:/ で代用されるからである (Sailaja, 2009:25)。例えば、表 6 で示されるように、会話 1 では “grEAt” が長母音で「エー」、会話 21 の “Oh”、“nO”、“Okay” も長母音で「オー」のように発音されている。

表 6. 二重母音/ei/と/ou/の単母音・長母音化に関する発音説明の例

Wow, that's <u>great</u> !	"grEAt"は長母音で「エー」と発音している（印英の特徴。米・英英語では二重母音で「エイ」。）[会話 1. 挨拶する]
<u>Oh</u> no, it's <u>okay</u> .	"Oh", "nO". "Okay"は長母音で「オー」のように発音されている（米・英英語では二重母音「オウ」）。[会話 21. 感謝する]
I <u>know</u> , you didn't mean to <u>break</u> it.	"knOW"は長母音「ノー」と発音している。"brEAK"は長母音で「エー」と発音している（印英の特徴。米・英英語では二重母音で「オウ」「エイ」。）[会話 23. 謝る]

<u>May</u> I help you?	"May"は単母音を用いて「メー」のように発音されている。また、"help"の/l/は明るいlで発音されている（どちらも印英の特徴）。[会話 33. 順序について述べる]
Pretty scary, <u>though</u> .	"though"の"th"は破裂音で、日本語のダ行音のような発音で、"thOUGH"は二重母音ではなく長母音を用いて「ドー」のように発音されている（いずれも印英の特徴）。[会話 34. 状況についてたずねる]

### 3. 7. /θ/と/ð/の閉鎖音化

インド英語では、“thank”などの無声歯摩擦音/θ/、“there”などの有声歯摩擦音/ð/が閉鎖音/t/と/d/となり（Gargesh, 2004:998）、それぞれ、日本語のタ行音とダ行音に聞こえる。表7にこの点についての説明例を挙げる。正確には前者の/t/は気音を伴った[tʰ]として発音される（Pandey, 2015）。

表 7. /θ/と/ð/の閉鎖音化に関する発音説明の例

I <u>think</u> they are all very busy.	"think"の/θ/は閉鎖音で、日本語のタ行と同じ。[会話 2. 注意をひく]
Oh, <u>there</u> he comes.	"there"の/ð/は閉鎖音で、日本語のダ行と同じ発音。[会話 2. 注意をひく]
I <u>think</u> it was kind of a wake up call for her.	"think"の"th"は破裂音で、日本語のタ行音のような発音になっている（印英の特徴）。[会話 34. 状況についてたずねる]
<u>Thank</u> you so much, Jasmine.	"Thank"の"th"は日本語のタ行音のように破裂する音になっている（印英の特徴）。[会話 6. 能力についてたずねる]

### 3. 8. 無気音で発音される/p, t, k/

インド英語では/p, t, k/の無声破裂音は音節初頭の母音の前であっても、気音を伴

わずに発音されることが多い。例えば、会話 1 の“one of the top business schools”の“top”は RP・GA では気音が入るが、ここでは気音が入らない上に、そり舌音になっているので、RP・GA の/tとはかなり違った音色になっている。

表 8. 無気音で発音される/p, t, k/に関する発音説明の例

That's one of the <u>top</u> business schools!	"top"の/tは舌先を後方に反らせ、そり舌音[t̪]で発音されている（印英の特徴）。無気音なので、「ト」と「ド」の中間のように聞こえる。[会話 1. 挨拶する]
Please tell me what <u>kind</u> of saris you are interested in.	“kind”の/kは気音を伴わずに発音されている（印英の特徴）[会話 2. 注意をひく]
<u>Perfect</u> .	"Perfect."の/pは気音が伴わずに発音されている（印英の特徴）。[会話 12. 例をあげる]

### 3. 9. どの位置にあっても「明るい l」で発音される/l/

RP・GA では/l/は語末や子音の前では「暗い l」[ɫ]（軟口蓋側面音）で発音される。しかしインド英語では、側面音/l/はどの位置にあっても「明るい l」で発音される（Sailaja, 2009:23）。表 9 で説明されているように、会話 1 の“school”や会話 30 の“milk”では「明るい l」が使われている。

表 9. どの位置にあっても「明るい l」で発音される/l/に関する発音説明の例

That's one of the top business schools!	"school"の/l/は明るい l になっている（印英の特徴）。[会話 1. 挨拶する]
Jasmine, I have been busy with my <u>practical</u> exams.	"practical"の/l/は明るい l で発音されている。英米英語では音節末の/l/は暗い l で発音され、「ウ/オ」の音色を伴う。[会話 6. 能力についてたずねる]
Wow! That sounds <u>cool</u> .	"cool"の/l/は明るい l で発音されている（印英の特徴）。[会話 39. 招待する]

Well, you need <u>milk</u> and rice.	"milk"の/l/は明るい l で発音されている。[会話 30. 特徴についてたずねる]
--------------------------------------	---

### 3. 10. 語アクセントのシフト

Gargesh (2004:1000) は、インド英語の顕著な特徴の一つは独特な語アクセントとイントネーションのパターンであるとしている。以下のように Sailaja は、頭字語、数字、名詞的複合語のアクセント等に区別して、インド英語の語アクセントについて分析している (Sailaja, 2009:29-31)。モジュールで見られるこれらの説明例を表 10 にまとめて示す。

#### (1) 頭字語

RP・GA では“BBC”や“TV”等の頭字語は最後の文字に第一強勢が置かれるが、インド英語では最初の文字に置かれる (Sailaja, 2009:31)。例えば、会話 1 の“I work for an MNC”の“MNC”は RP・GA では“C”に第一強勢が来るのが普通であるが、“M”に第一強勢が置かれている。

#### (2) 数字

インド英語では“thirteen”、“fourteen”等の“-teen”がつく数字のアクセントは文脈に拘わらず、最初の音節に第一強勢が置かれる。例えば会話 22.に出てくる“I live in C 13.”は RP・GA では“thirteen”の第二音節目 (/ti:n/) に第一強勢が置かれるのが普通だが、ここでは第一音節に置かれている。

#### (3) 名詞的複合語のアクセント

RP・GA では、名詞的複合語は最初の要素に第一強勢が置かれ、そこでピッチの下降が起こる型が多い。しかし、このモジュールでは、両方の要素に同等の強勢が

置かれる傾向にある。会話10の *handicrafts*、会話11の *workshop*、会話19の *forecast* などがその例である。

(4) その他

その他の個別の単語に関して言えば、インド英語では単語のアクセントの位置が母語話者の英語変種とは違う位置に置かれることがよくある。モジュールでは、表10が示すように、会話11の“*ready*”、会話10の“*colleagues*”、会話4の“*encouraged*”と“*actually*”、会話6の“*portrait*”など、多くの個別の語で語アクセントのシフトが見られる。

表 10. 語アクセントのシフトに関する発音説明の例

I work for an <u>MNC</u> .	"MNC"のような頭文字語は英英語、米英語では最後の頭文字に第一アクセントが来るが、インド英語では最初の頭文字に第一アクセントが来る。[会話 1. 挨拶する]
<u>IIM</u> Ahmedabad, awesome!	"IIM"は最初の頭文字に第一アクセントがきている。頭文字語は英英語、米英語では最後の頭文字に第一アクセントが来る。[会話 1. 挨拶する]
I live in C- <u>13</u> .	"thirteen"は通常"-teen"にアクセントが置かれるが、ここでは"thir-"に置かれている。[会話 22. 自己紹介する]
It's in <u>workshop</u> , and it will not be <u>ready</u> before evening.	"workshop"は英英語、米英語では"work-"にアクセントがあるが、ここではアクセントの移動が起こって"-shop"が強く発音されている。"ready"も"-dy"にアクセントがある。[会話 11. 依頼する]
She wants to buy some Indian <u>handicrafts</u> as gifts for her <u>colleagues</u> there.	"colleagues"のアクセントが"-ea-"の部分に置かれ、最初の音節の母音は弱化している（英英語、米英語では最初の音節にアクセントがある）。[会話 10. 提案する]

<p>I <u>encouraged</u> them to ask questions in the class, and they <u>actually</u> asked many questions.</p>	<p>"encourage"は語アクセントが移動し、第 1 音節"en-"に置かれている。欧米の英語では、第 2 音節"-cou-"にアクセントが置かれる。"actually"も語アクセントが移動し、第 2 音節"-tual-"に置かれている。欧米の英語では、第 1 音節"ac-"に置かれる。[会話 4. 経験についてたずねる]</p>
<p>A <u>portrait</u> of Radha and Krishna.</p>	<p>"portrait"はアクセントが"-trait"に来ている。米英語・英英語では"por-"にアクセントが来る。[会話 6. 能力についてたずねる]</p>
<p>See, you have an oily skin, and the cream that you are asking for is <u>relatively</u> thick in texture and is greasy.</p>	<p>"relatively"は第 2 音節に第一アクセントを置いて「リレイティブリィ」と発音されている。英・米英語では第 1 音節に第一アクセントが置かれる。インド英語では語の強勢の位置が移動することがある。[会話 9. 比べる]</p>
<p>I think this would be <u>appropriate</u> for you. And it has a nice fragrance too.</p>	<p>"appropriate"はアクセントが"-ate"に置かれ、[ei]と発音されている。英・米英語では"-pro-"にアクセントが置かれる。[会話 9. 比べる]</p>
<p>What about my bag and <u>mobile</u>?</p>	<p>"mobile"は、英英語や米英語では第 1 音節"mo-"にアクセントが置かれるが、ここでは第 2 音節"-bile"にアクセントが置かれている。[会話 16. 禁止する]</p>
<p>We are going to my <u>parents'</u> house.</p>	<p>"parents' house"は標準英・米英語では最初の音節 (par-) が強く、高く発音されるが、インド英語では弱音節 (-ents) の方が高く発音されている。[会話 26. 予定を述べる]</p>
<p>We will plan it indoors and look for a banquet hall <u>instead</u>.</p>	<p>"instead"は英英語や米英語では"-stead"にアクセントが置かれるが、ここでは"in-"に置かれている。[会話 19. 希望を述べる]</p>
<p>She just <u>irritates</u> me.</p>	<p>"irritates"の/r/はたたき音で、日本語の「ラ行」のような音になっている。また、アクセントが第 2 音節の"-ri-"に置かれている。米英語や英英語では第 1 音節の"ir-"に置かれる。[会話 35. 条件をつける]</p>

インド英語では、母語話者の英語変種に比べるとアクセントの位置が比較的自由に、ヴァリエーションが観察される。ピッチ・アクセントであるためアクセントが来ない音節も弱化しないことが多く、そのためアクセントの位置が揺れやすいものと推測される。

### 3. 11. 弱音節の完全母音化

RP・GA で弱音節になる音節が弱化せずに、完全母音 (full vowel)、で発音される傾向がある。例えば、表 11 が示すように、モジュールの会話 6 に出てくる“hopeless”の“-less”が/lɪs/ではなく/les/、会話 9. に出てくる“appropriate”の最終音節の-ate が/ət/ではなく/et/、会話 19. に出てくる“unpredictable”の“-able”が/əbl/ではなく/eɪbl/になる。

表 11. 弱音節の完全母音化に関する発音説明の例

I'm <u>hopeless</u> with drawings.	"hopeless"の"less"の母音が弱化しないで、[e]と発音されている。[会話 6. 能力についてたずねる]
I think this would be <u>appropriate</u> for you, And it has a nice fragrance too.	"appropriate"はアクセントが"-ate"に置かれ、[ei]と発音されている。[会話 9. 比べる]
And also rain is <u>unpredictable</u> in July.	"unpredictable"の"a"が二重母音で発音されており、「アンプレディクテイブル」のような発音となっている。アクセントも移動し、"-able"に置かれている。米英語や英英語では"-dic-"にアクセントが置かれる。[会話 19. 希望を述べる]
I was being <u>thoughtless</u> .	"thoughtless"の“less”の母音が弱化しないで[e]と発音されている。[会話 38. しないでくれと言う]

### 3. 12. 複数形態素 {s} の発音

インド英語では複数を表す形態素 {s} は RP・GA の/s//ɪz/の音韻交替と異なり、



歯擦音 (/s, z, ʃ, ʒ, tʃ, dʒ/) の後は/ɛs/、その他の音の後には有声か無声かに拘わらず、全て/s/で発音される傾向がある (Sailaja, 2009)。モジュールのなかでは、saris、hours、shoes などの語の複数形態素の発音が、RP・GA の/z/ではなく、/s/となっている。また、classes の複数形態素の発音も RP・GA の/ɪz/ではなく、/ɛs/で発音されている。表 12 でその説明例を示す。

表 12. 複数形態素 {s} の発音に関する説明例

Can you show us some <u>saris</u> ?	"saris"の最後の"s"は無声化され[s]で発音されている。[会話 2. 注意をひく]
I had two <u>classes</u> .	"classes"の最後の"es"は/[ɛs]で発音されている。欧米の英語では/ɪz/が使われる。[会話 4. 経験についてたずねる]
Can I borrow your scooter for a couple of <u>hours</u> .	"hours"の最後の"s"は無声化され[s]で発音されている。[会話 11. 依頼する]
So please leave your <u>shoes</u> at the shoe rack and collect a token.	"shoes"の最後の"s"は無声化され[s]で発音されている。[会話 16. 禁止する]

### 3. 13. 発話レベルにおける音声的特徴

#### (1) 文頭の代名詞

RP・GA では強調や対比の場合を除いて、通常文頭の代名詞にはアクセントを置かず弱く発音されるが、インド英語では特別な意味がなくともアクセントが置かれることがよくある (Sailaja, 2009)。モジュールのなかでは、以下の文頭の代名詞にアクセントが置かれている。

会話 2: Oh, we are looking for Kancivaram in shades of pink.

会話 4: I had two classes.

We had an orientation program in the morning.

Then **I** had to complete some paperwork after lunch.

会話 9: Yes **I'll** take it.

会話 32: **I** try to go whenever I can.

### (2) 修飾語＋名詞からなる名詞句のアクセント

インド英語では音調群の最後に来る名詞句が修飾語＋名詞からなる場合は、名詞ではなく修飾語の方に音調核が来る傾向がある (Pandey, 2015)。会話 1 の“*Yes, that's a good idea.*”を例に挙げれば、RP・GA では“*idea*”に音調核が来るのが一般的であるが、ここでは“*good*”に音調核が置かれている。

会話 1: Yes, that's a **good** idea.

会話 2: We have a **large** collection in that color.

会話 7: It will take you through a **small** garden.

会話 8: You're still using the same **old** phone.

会話 31: I'm getting a chicken and a **cold** drink.

会話 32: The doctor said it was just a **mild** stroke.

### (3) 強勢とリズム

RP・GA は強勢が比較的等に間隔で繰り返される強勢拍のリズムの傾向を持つと言われている (竹林 1996)。このため、強勢拍間にある強勢のない音節が弱化し、弱音節になる傾向がある。それに比べてインド英語は音節に等時性がある音節拍のリズムを持つ傾向がある (Trudgill and Hannah, 2017)。このため、RP・GA で弱音節になる機能語が完全母音 (full vowel) を持った強形で発音されることが多い (Pandey, 2015)。例えば、会話 33 の“*to*”は、RP・GA では弱形の/tə/で発音されるのが普通だが、ここでは強形の/tu:/が使われている。会話 19 の“*of*”は RP・GA では弱

形の/əv/で発音されるのが普通だが、ここでは強形の/ɒf/が使われている。

会話 33: First, you need to complete the application form. (/tə/→/tu:/)

会話 19: Is the date of Greetu's wedding final? (/əv/→/ɒf/)

会話 20: Sir, Professor Satyanath participated in the World Englishes project of  
your university. (/əv/→/ɒf/)

会話 27: Would you like salad or French fries? (/jə/→/ju:/; /ər/→/ɔ:/)

また、RP・GA ではアクセントが来る強音節はピッチが高くなるだけでなく、長さも長く、強さも強くなるため、アクセントが来ない弱音節と比べるとかなりのプロミネンス（卓立）を持つ。一般に内容語に強勢が来て、機能語には強勢が来ないことが多い（竹林 1996）。そのため、情報量が多い内容語が卓立を伴うという特徴がある。それとは対照的にインド英語ではアクセントの来る音節はピッチが変化するだけで、長さ、強さには余り変化がないことが音響分析に基づき報告されている（Wiltshire and Moon, 2003, cited in Pandey, 2015）。このため、インド英語ではアクセントが置かれる内容語の音節がRP・GA の場合のように卓立を伴わないという特徴があり、この特徴が内容語の明瞭度に影響を与え、単語の理解度を妨げる要因になると考えられる。

#### (4) 句のイントネーション

RP・GA では句中の音調核が来る音節（tonic syllable）はピッチが高く、強さも強く、長さも長くなり、その直後でピッチが下がる High-Low 型が一般的であるが、インド英語では低いピッチで始まり、その直後に上昇する Low-High 型が頻繁に起こる（Pickering, 2018）。例えば、会話22の“He is here / on an official visit / to sign an agreement / with the University of Delhi.”は4つの音調群に分けて発音されているが

(斜線“/”は音調群の境界を示している)、音調核が置かれる下線部の“here”、“visit”、“agreement”は全て Low-High 型で発音されている。以下の下線部の音調核も同様に Low-High 型で発音されている。

会話 4: I was a bit nervous initially/ but ~

会話 5: About two cups of cut vegetables/ onions, ~

会話 16: We have lockers/ where ~

会話 22: He is here / on an official visit/ to sign an agreement /  
with the University of Delhi.

会話 26: My parents are complaining / that ~

会話 35: If she’s going to Ravi’s party/, ~

母語話者英語変種で High-Low 型が期待される音調核が Low-High 型で発音されるというインド英語の特徴はインド英語の理解度に影響を及ぼすと言われている (Pickering, 2018)。

#### (5) 疑問詞疑問文のイントネーション

RP・GA では疑問詞疑問文のイントネーションは下降調が基底となるが、単刀直入的でぶしつけな口調を避けるために上昇調が用いられることもある (竹林 1996)。インド英語では丁寧さを出すために初めて会う人や目上の人に話す時は上昇調がよく用いられることが報告されている (Sailaja, 2009)。本モジュールでも以下の疑問詞疑問文が上昇調で発音されているのが観察され、以下のように説明している。

表 13. 疑問詞疑問文のイントネーションに関する説明例

Where exactly do you want to go?	疑問詞で始まる疑問文だが、上昇調で発音されている。インド英語では良く知らない人や目上の人に話す時は疑問詞で始まる疑問文でも上昇調で発音されることがよくある。[会話 7. 場所についてたずねる]
Hi, how can I help you?	疑問詞で始まる疑問文だが、上昇調で発音されている。インド英語では良く知らない人や目上の人に話す時は疑問詞で始まる疑問文でも上昇調で発音されることがよくある。[会話 9. 比べる]
What is the matter?	英英語、米英語では、"what"などの疑問詞で始まる疑問文は下降調のイントネーションとなるが、インド英語では上昇調となることがある。[会話 10. 提案する]
So why do you want to come to this university?	英英語や米英語では、"why"などの疑問詞で始まる疑問文は下降調のイントネーションであるが、インド英語では上昇調となることがよくある。[会話 36. 理由を述べる]
So how long have you been living here?	疑問詞で始まる疑問文だが、上昇調で発音されている。インド英語では良く知らない人や目上の人に話す時は疑問詞で始まる疑問文でも上昇調で発音されることがよくある。[会話 22. 自己紹介する]

(6) 発話における音声変化

a. 語末の /t/, /d/ と語頭の /j/ の融合同化の有無

RP・GA の会話体では語末の /t/ と語頭の /j/ が融合同化して /tʃ/ になり、語末の /d/ と語頭の /j/ が融合同化して /dʒ/ と発音される音声現象が広く観察される (Rogerson-Revell, 2011; Celce-Murcia, Brinton, and Goodwin, 2010)。例えば、did you /drɪdʒu:/ が /dɪdʒu:/ と発音され、want you /wɒntʃu:/ が /wɒntʃu:/ のように発音される。本インド英語モジュール会話ではこの融合同化がほとんど見られず、/t.ju:/ と /d.ju:/ とそれぞれ発音されている。融合同化が少ない理由として、インド英語の /t/ と /d/ がそり舌音なので、

後続の硬口蓋接近音/j/と融合同化し難いという調音的な理由だと考える。本モジュールでは、以下の会話でこの特徴が表れている。

- 会話 1: What did you do after college?  
会話 3: Would you like to join us?  
会話 4: Did you have any classes to teach?  
会話 21: Won't you come in?  
会話 23: Where did you get it?  
会話 25: Did you go?  
会話 27: Would you like salad or French fries?  
会話 30: How did you make it?  
会話 38: I know what you mean.

b. 母音の間に挟まれた/t/のたたき音化の有無

GA を含む北米の英語やオーストラリア英語、ニュージーランド英語の会話体では母音に挟まれた/t/（語中の場合は後続の母音に強勢が来ない場合）はたたき音化され[e]として発音されることが多いが、RP では/t/は通常たたき音化されない。本モジュールのインド英語会話でも多くの場合、この音声環境に生起する/t/はたたき音化されずに発音されている。この点はRP に近いと言えよう。但し、前節で述べたように/t/はそり舌音として発音されるので、RP の母音間の/t/とはかなり異なった響きになっている。たたき音化されない理由としては、規範的なRP の影響が考えられるが、/t/をたたき音化すると、/t/のたたき音と区別ができなくなるということも要因として働いていることが考えられる。

- 会話 1: What are you doing there?

会話 9: What is so special about it?

会話 10: What is the matter?

会話 16: Yes, it is part of our temple culture.

会話 26: Yeah, they're really excited about it.

会話 34: She's doing much better.

会話 37: See that little printer icon at the bottom?

### 3. 14. 発音のアメリカ英語化

前節 3.1.で、標準インド英語は非 R 音性的な英語であり、“last”、“can’t”の様な Ask Words や“vase”、“worry”、“schedule”等の RP と GA で相違がある個別の単語の発音ではイギリス英語式で発音されると述べたが、本インド英語モジュールでは、以下に示すように、アメリカ英語式 (GA) 発音も観察された。

#### (1) 個別の単語

##### a. tomato

Here it says that the tomato soup is spicy. (会話 27)

アメリカ英語式の/təmeɪtoʊ/で発音されている。しかし/t/はたたき音化していない。

##### b. been

I have been in Chennai for the past years. (会話 1)

Where have you been? (会話 6)

いずれもアメリカ英語と同じ/bm/が使われている。RP では/bi:n/が使われる。

##### c. twenty

Umm... not more than twenty minutes. (会話 3)

会話 3 の女性 A はアメリカ英語式に/n/の後の/t/を省いて/tweni/と発音している。

他方で、会話 34 の男性 A は“which starts in twenty minutes”のなかの“twenty”の/n/の

後の /l/ を発音している。両者とも 20 歳前後の若いインド人であるが、個人差があるといえよう。

### (2) 接近音 r の音色を帯びた母音 (r-colored vowel)

前節 3.4. でインド英語では R 音性的発音が使われることもあると述べたが、一般インド英語発音ではこの R はたたき音 [ɾ] のことが多い (Pandey, 2015)。しかし、3.4. の表 4 の会話 35 のように、このインド英語モジュールではアメリカ式の接近音 [ɹ] の音色を帯びた母音 (r-colored vowel) がしばしば観察された。

### (3) /l/ のたたき音化

前節 3.13.(6b) では、母音の間に挟まれた /l/ は、たたき音化されないことが多いと指摘したが、本モジュールでは、以下に挙げるように、/l/ がアメリカ英語式にたたき音化されているケースも数か所観察された。

会話 17: What about breakfast?

(“What” と “about” が連結し、/l/ がたたき音になっている。)

No, I better get going. (“better” の /l/ がたたき音化している。)

会話 24: It was a lot of fun.

(“lot” と “of” が連結し、/l/ がたたき音化している。)

会話 31: I just don't get what's good about it.

(“about” と “it” が連結し、/l/ がたたき音化している。)

But I'm getting a chicken and a cold drink.

(“getting” の /l/ がたたき音化している。)

Just talking about it makes me hungry.

(“about” と “it” が連結し、/l/ がたたき音化している。)



### 会話 39: Anyway, I gotta go.

(“gotta”は“got”と“to”が連結しただけな会話体の表現であるが、アメリカ英語式にたたき音で発音されている。)

近年、北アメリカの IT 企業で働くインド人が増え、多くのインド人が北アメリカとインドを行き来している。またアメリカの映画、テレビ番組、音楽等の大衆文化もインドの若者の間に広まっている。北アメリカの英語との接触の機会が増えることにより、伝統的に RP を規範としてきたインドの英語発音も変わってきているものと推測できる (Reddy, 2019)。

## 4. おわりに

本稿ではインド英語の発音の特徴を KANDA×TUFUS 英語モジュールを通して見てきた。インド英語の発音は画一的ではなく、かなりの幅のヴァリエーションがあることが本インド英語モジュールと文献を通じて明らかになった。本稿で取り上げたインド英語の特徴を知り、その特徴に慣れることは日本人がインド人と英語でコミュニケーション取る上で重要だと筆者らは考える。一般に発音の理解度 (intelligibility) の議論では話者の発音の明瞭性が問題になるが、話者の発音の理解度は話し手と聞き手の双方の問題である (Jenkins, 2000; Levis, 2018)。つまり、聞き手が話し手の発音の特徴を掴み、理解力を上げることが母語が違う者同士が英語でコミュニケーションを取る際に重要になってくる。その意味で本インド英語モジュールが日本人のインド英語の理解力向上にとっての一助になれば幸いである。

## 謝 辞

本論考は、日本学術振興会の科学研究費事業「多様な英語への対応力を育成するウェブ教材を活用した教育手法の研究」（基盤研究(B)、課題番号：18H00695、研究代表者：矢頭典枝）による研究成果の一部である。助成金の交付に深甚の謝意を表する。

### <参考文献>

#### 【欧文】

- Bansal, R. K. (1976). *The intelligibility of Indian English* (2<sup>nd</sup> ed.). Monograph 4, Hyderabad: CIE & FL.
- Celce-Murcia, M., Brinton, D. M., and Goodwin, J. M. (2010). *Teaching pronunciation: A course book and reference guide* (2<sup>nd</sup> ed.). New York, NY: Cambridge University Press.
- Collins, B. & Mees, I. M. (2013). *Practical phonetics and phonology: A resource book for students* (3<sup>rd</sup> ed.). London, England: Routledge.
- Gargesh, R. (2004). Indian English: phonology. In W. Edgar, E. Schneider, and B. Kortmann (Eds.), *A handbook of varieties of English, vol. 1: Phonology* (pp.992-1002). Berlin, Germany: Mouton de Gruyter,
- Gargesh, R. (2008). Indian English: phonology. In R. Mesthrie. (Ed.), *Varieties of English, vol. 4: Africa, South and Southeast Asia* (pp.231-243). Berlin, Germany: Mouton de Gruyter.
- Giles, H., Mulac, A., Bradac, J. J., and Johnson, P. (1987). Speech Accommodation Theory: The first decade and beyond. *Annals of International Communication, vol. 10 – Issue 1: Communication Year Book 10*, 13-48.
- Government of India, Ministry of Home Affairs, *Census 2011, Data on language and mother tongue, Statement 2: distribution of population by scheduled and other languages*.
- Government of India, Ministry of Law and Justice, Legislative Department (2018). *The Constitution of India [As on 31st July, 2018]*.

- Holmes, J. (2013). *An introduction to sociolinguistics*, (4<sup>th</sup> ed.). New York: Routledge.
- Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language*. Oxford, England: Oxford University Press.
- Kachru, B. B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the Outer Circle. In R. Quirk and H. Widdowson (Eds.), *English in the world* (pp.11-30). Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Levis, J. (2018). *Intelligibility, oral communication, and the teaching of pronunciation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Low, E. (2017). Suprasegmental aspects of pronunciation in new Englishes. In O. Kang, R. I. Thomson and J. M. Murphy(Eds.), *The Routledge handbook of contemporary English pronunciation* (pp. 527-537). London, England: Routledge.
- Nihalani, P., Tongue, R. K., Hosli, P., & Crowther, J. (2004). *Indian and British English: A handbook of usage and pronunciation*. Oxford, England: Oxford University Press.
- Pandey, P. (2015). Indian English pronunciation. In M. Reed and J. M. Levis (Eds.), *The Handbook of English pronunciation* (pp. 301-319). West Sussex, England: John Wiley & Sons, Inc.
- Pickering, L. (2018). *Discourse intonation: A discourse-pragmatic approach to teaching the pronunciation of English*. Ann Arbor, Michigan: University of Michigan Press.
- Reddy, C. R. "The Reader's Editor writes: Why is American English becoming part of everyday usage in India?" *Scroll.in*. April 18, 2019.
- Rogerson-Revell, P. (2011). *English phonology and pronunciation teaching*. New York, NY: Continuum International Publishing Group.
- Sailaja, P. (2009). *Dialects of English - Indian English*. Edinburgh, Scotland: Edinburgh University Press.

- Trudgill, P. & Hannah, J. (2017). *International English: A guide to varieties of English around the world* (6<sup>th</sup> ed.). New York, NY: Routledge.
- Wells, J. C. (1982). *Accents of English: Volume 3: Beyond the British Isles*. Durham, NC: Cambridge University Press.

### 【和文】

- 新城真里奈、矢頭典枝 (2014) 「大学における英語変種を教える試み—TUFS × KANDA 英語モジュールの開発を事例に」『外国語教育研究』第17号、外国語教育学会、127-146 頁
- 新城真里奈 (2015) 「英語モジュールにみる内部圏の英語変種における発音の諸相」『グローバル・コミュニケーション研究』第2号、57-72 頁
- 関屋康、矢頭典枝、フィリップ・マーフィー (2015) 「KANDA×TUFS 英語モジュール—開発の意義と特徴—」『グローバル・コミュニケーション研究』第2号、1-17 頁
- 竹林滋 (1996) 『英語音声学』研究社
- 吉富朝子 (2015) 「世界の英語変種と第二言語語用論に対する意識を高めるための統合型学習のすすめ：国際英語のコミュニケーション能力を養うために」*Computer & Education*, 39 巻、26-31 頁

### <英語モジュール URL>

「神田外語大学×東京外国語大学 (KANDA×TUFS) 英語モジュール」

<http://labo.kuis.ac.jp/module/>

「東京外国語大学言語モジュール 英語」

<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/en/>